

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆書	隷書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
典	テン ふみのり								王勃詩序
兼	ケン かねる あわせる								王勃詩序
円	エン まるい まどか まる								王勃詩序
内	ナイ ダイ うち いれる								王勃詩序
冊	サツ サク ふみ								王勃詩序

【兼】楷書では下部が「𠂔」になる字体が一般的。干禄字書の序文には2種類の字体が使われている。
 【円】「円」の字体は中国では使用例が見えない。日本では空海の「三十帖策子」に使用例があり、その後ずっと使われ続けている。「円」は「圓」の「員」を縦線に略してできた字体

だと思われる。岩田母型製造所所有の弘道軒四号に「圓」の字体が見えないが、三号にはある。「圓」は楷書では「員」の「口」を「厶」または「△」に書く。これは四角の連続を避けて変化をつける意識が働いているのかもしれない。「口」を点2つに略すのは漢代から行われているが、後には「口」を点2

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
典	典	典	典				典	典		典	典	典
兼	兼	兼	兼	兼	兼		兼	兼	兼	兼		兼
円	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
内	内	内	内	内	内	内	内	内	内	内	内	内
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊

つに略す例もある。貨幣の「元」は「圓」の仮借。
 【内】この字の注意点は「人」か「入」か、最終画を払うか止めるか、の2点。説文も康熙字典も「入」部に分類。
 【冊】なりたちに「冊の形」とも「簡をひもでくつた形」ともあり、もともと2系統の字種があるとも。康熙字典に「冊

はあるが「冊」ない。文部省活字も「冊」ではなく「冊」。太宰が「冊」を書いているが明朝体で字を覚えたのだろうか。『明朝体活字字形一覧』によれば、「冊」の登場は1860年の英華書院の13.5ポイント、明朝体での「冊」の登場は1887年の大阪国文社五号が最も早い。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆書	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
涸	テウウ しぼむ		涸	涸			涸 涸 涸	涸 涸 涸	性霊集
							涸 涸	涸 涸	趙志集
凍	トウ こおる こごえる いてる しみる		凍	凍			凍 凍 凍	凍 凍 凍	杜家立成
							凍	凍	
凌	リョウ しのぐ		凌	凌		凌 凌	凌 凌	凌 凌	
							凌	凌	
凝	ギョウ こぼる こらす		凝	凝		凝 凝 凝 凝	凝 凝 凝 凝	凝 凝	聖武天皇集
							凝	凝	
氷	ヒョウ こおり ひこおる		氷	氷		氷 氷 氷 氷	氷 氷 氷 氷	氷 氷	饗野指歸
							氷	氷	
凡	ボン ハン およそ すべて なみ	凡	凡	凡	凡	凡 凡 凡 凡 凡	凡 凡 凡 凡 凡	凡 凡 凡 凡	
							凡	凡	
処	ショ ところ おく おる	処	処	処	処	処 処 処 処 処	処 処 処 処 処	処 処 処 処	法華義疏
							処	処	
處		處	處	處	處	處 處 處 處 處	處 處 處 處 處	處 處 處 處	王勃詩序
							處	處	
							處	處	
							處	處	

【凍】説文では「冫」だが漢代の武威漢簡、北魏の唐雲墓誌は「冫」に従っており、干禄字書も「冫」を〈正〉とし、「冫」を〈俗〉とする。九經字様では説文篆文に従って「冫」の字体を載せている。我が国では「冫」に従った字体が標準。

【凌】通用体では旁を「夂」とすることが多く、文部省の漢字

整理案でもこの字体が検討されたことがあった。偏を、誤って「冫」にすることがあるが、「凌」と「凌」は別字。

【凝】説文解字では「凝」は「氷」の俗体だという。干禄字書では「氷」を「氷」の〈通〉としている。

【凡】説文解字では「凡」を親字として掲げ、「處」を或体(異

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん ころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
涸	涸	涸	涸	涸								涸 涸
												涸 涸
凍	凍	凍	凍	凍			凍 凍	凍				凍 冻
												凍 冻
凌	凌	凌	凌	凌	凌	凌	凌					凌 凌
												凌 凌
凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝				凝 凝
												凝 凝
氷	氷	氷	氷	氷	氷	氷	氷	氷				氷 凝
												氷 凝
凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡 凡
												凡 凡
処	処	処	処	処	処	処	処	処	処	処	処	処 处
												処 处
處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處 處
												處 處
												處 處
												處 處

体字)としている。「処」は「處」の略字ではなく古代からある異体字で金文にも「処」と思われる字体がある。「処」「處」それぞれに正字体と通用体がある。馬王堆の字体が「処」の通用体。五經文字で〈俗〉としている字体が「處」の通用体。漱石は「処」「處」両方の字体を使うが、「処」の使用は「と

ころ」と訓読みする場合の1度だけ。音読み及び熟語での使用は「處」を使う。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
夙	たこ 人①国								
夙	なぎ 人①国								
凱	ガイ 人①			凱			凱 凱		凱
							凱 凱		
豈	ガイ キ あに ②		豈 豈		豈 豈 豈 豈 豈 豈		豈 豈 豈 豈 豈 豈		
			豈		豈		豈 豈		
愷	ガイ たのしむ やすい やわらく ③		愷 愷	愷	愷		愷		
凶	キョウ わるい 常①	凶 凶 凶	凶 凶	凶 凶	凶 凶	凶 凶 凶 凶	凶 凶 凶 凶		
凹	オウ へこむ くぼむ ぼこ 常①								
出	シュツ スイ だす でる いず 数1 常①	出 出 出	出 出	出 出	出 出 出 出 出 出 出 出		出 出 出		
		出 出 出		出 出			出 出 出		
		出 出		出 出			出		
		出		出			出		
凸	トツ でこ 常①								

【夙】日本で作られた字。

【夙】日本で作られた字。

【凱】説文には載っていない字で、篆書ではかわりに「豈」を使う。「愷」も意味の近い字らしく、説文は「豈」を「還師振旅樂也」、「愷」を「樂也」とする。

【凹】1981年(昭和56年)に当用漢字表外から常用漢字表に追加された。ほとんどの書道字典には不掲載だが、唯一『五體字類』第三版に「懷素」が掲載されているが本書では採用しなかった。

【出】「山」が2つと解する字体は南北朝期に出現するが、こ

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
			夙				夙		夙			
			夙				夙					
	凱	凱	凱				凱					凱
			凱				凱					凱
			凱				凱					凱
豈	豈	豈	豈				豈					豈
			豈				豈					豈
			愷				愷					愷
			凶				凶					凶
			凹				凹					凹
出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出
			出				出					出
			凸				凸					凸

の字体は九經字様では〈訛〉としている。『陸軍幼年学校用字便覧』では「山」の下に「夕」を配する字体が掲載されているが、実際の使用例は未見。「山」の下に点を2つ書く例は近世の文書に使用例がある。

【凸】1981年(昭和56年)に当用漢字表外から常用漢字表に追加

された。ほとんどの書道字典には不掲載。唯一『五體字類』第三版に「宋人」の書として1例掲載されているが、出典が確定できないので本書には載せなかった。